

悩める音楽家の文学的仮装

——音楽小説としてみたE. T. A. ホフマンの『黄金の壺』——

西谷明子

広島大学大学院総合科学研究科

Literary Camouflage of a Frustrated Musician E.T.A.Hoffmann's "Der Goldne Topf" as a Musical Novel

Akiko NISHITANI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

ドイツ・ロマン派の作家として知られるE. T. A. ホフマン (1776-1822) は、作家として以外に、法律家、画家、音楽家としても高い水準の才能をもっていた。彼の主たる職業は法律家であり、真に使命だと感じていたのは音楽の道であった。ホフマンの文学作品には、法律家、画家、音楽家としての才能や、それらの仕事で得られた経験がふんだんに活かされている。しかし文学研究の場において、ホフマンの作家以外の面についてはいまだ十分に考慮されているとはいえない。本論文は、ホフマンが重きをおいていた音楽の視点から、彼の文学作品を理解しようという試みである。なかでも特に、作家としてのホフマンの転機となった代表作『黄金の壺』をとりあげ、その作品構造や個々のモチーフに音楽が与えた影響を検討した。

「序」ではホフマン伝を記述し、彼の人生とそこにおける『黄金の壺』という作品の位置づけを確認した。『黄金の壺』は、音楽家として挫折しベルリンで法律家として再就職したホフマンに、作家としての名声を与える大きなきっかけとなった作品である。現実のなかに突然、非現実が紛れ込むホフマンのメールヒェンは、当時の作家

たちにも驚きを与えた。ホフマンの作品は発表当初から一部文壇を除いて人気を博したが、ドイツにおいて芸術的文学作品として評価されるのは20世紀以降のことである。ここではおもに20世紀以降の『黄金の壺』をめぐる重要な研究を紹介し、その解釈の多様さを示した。

本論文は、主としてホフマンの音楽作品、音楽論をとりあげる第一部（第一章～第三章）と、それを踏まえて『黄金の壺』を解釈する第二部（第四章～第六章）とに大きく分けられる。

小説『黄金の壺』とホフマンの音楽作品とを結びつける最初の試みが第一章である。ここでは『黄金の壺』と同時期に制作されたもう一つのメールヒェン、すなわちオペラ『ウンディーネ』に着目した。フケーのメールヒェンを原作としたこのオペラは音楽家ホフマンの代表作であり、メールヒェンオペラという新しいジャンルを拓いたことで音楽史的にも意義深いものである。この曲は『黄金の壺』と制作時期が重なっているばかりでなく、物語構造、登場人物の配置にも共通するところがある。特に両作品のヒロインは、バンベルク時代の歌の教え子、ホフマンの片思いの相手でもあったユーリア・マルクを原型とする。両作品は似通っ

ていながら結末は対照的である。『黄金の壺』の主人公アンゼルスはヒロインである火の精の娘ゼルペンティーナと結ばれ楽園アトランティスへと至るが、『ウンディーネ』の主人公は水の精ウンディーネではなく人間の娘を選び、ウンディーネの手にかかって命を落とす結末となる。楽園アトランティスがホフマンの考える理想音楽の世界だとすると、アンゼルスはそれを手にした音楽家ということになる。しかし彼は芸術のもつ危険な魔力に魅了されて人間社会での生活を捨ててしまっている。これはホフマンの考える、社会に受け入れられる理想的音楽家像ではなかった。

ホフマンの音楽観をより深く知るため、彼の執筆した音楽論のうち、重要な二つを取り上げたのが第二章と第三章である。第二章では『新旧教会音楽』を読み、ホフマンの考えた理想音楽の世界と作曲家との関係は、キリスト教のアナロジーであることを明らかにした。ホフマンにとって理想的な教会音楽とはルネサンス時代、なかでもパレストリーナの作品だった。信仰心を高める目的で作られた古い時代の素朴な教会音楽に比べて、「現代」のものは世俗的にすぎるとというのが彼の主張である。またこの音楽論は「現代」の音楽を批判するばかりでなく、声楽の振興のためのジグアカデミーの設立など具体的な提案も含んでいる。第三章ではベートーヴェンの交響曲第五番批評という、音楽史的に非常に重要な批評文を扱った。ホフマンがこの曲を評して多用した「ロマンティック」という概念は、不安、憧れ、無限、異世界というキーワードで説明できる。定まっていないこと、曖昧であること、手の届かない状態にあることがホフマンにとって重要であり、それらの性質を備えたベートーヴェンの交響曲は非常に斬新ですぐれた作品だと彼は評価した。

第四章では、『黄金の壺』における楽園アトランティスとその役割について述べた。作中にはアトランティス神話が二つ挿入されている。アトランティス神話で語られるのは、楽園の成り立ちと、火の精が、また人類がその楽園を喪失した物語である。『黄金の壺』とは、地上に堕ちた火の精のうまれかわりであるリントホルストと、主人公である大学生アンゼルスが楽園への帰郷を目指す

物語なのだった。物語の最後には、アトランティスに行ったまま帰らないアンゼルスにかわり、物語の「語り手」がリントホルストの力を借りてアトランティスの幻影を目撃し、それを報告する形で現在のアトランティスの様子を語った。作中でアンゼルスが段階的にポエジーを身につけ、成長していく様子は音楽的に描写されている。ゼルペンティーナが現れるときに響く三和音は、アンゼルムの成長段階に応じて音量が大きくなっていく。また彼の感覚は、次第に五感のすべてを聴覚的刺激へと変換するようになる。夕陽の光や花の香りが言葉として、さらには音楽として認識されるのである。このような過程を経てたどりつく、万物が美しく調和した音を奏でる、音が力となる世界であるアトランティスは、ホフマンの考えた理想音楽の世界と重なる概念であり、さらにその思想の源はキリスト教的世界観にある。

アトランティスが理想音楽の世界だとすると、アンゼルスをアトランティスへと導く教育者、仲介者としての役割を果たすリントホルストは、音楽批評家の立場と重なる。第五章は、作中に音楽批評家ホフマンの姿を見出す試みである。リントホルストは現実世界で人間として暮らしながら、同時に楽園と世界の真の調和を知る人物である。これは理想の批評家像ということになる。リントホルストはその立場から素質あるアンゼルスを教え導く。一方「語り手」は読者とメールヒェンとの仲介者である。彼はアトランティスを言葉で表すことができず、悩む。万物の調和を認識することでたどりつけるアトランティスを、それを認識できない者が描写することは不可能なのである。このもどかしさは、音楽という本来言葉で表すことができないものを言葉によって伝えなければならぬという音楽批評家の悩みに近い。

このように音楽家ホフマンの思想を濃厚に織り込んだ小説『黄金の壺』は、彼がベートーヴェンの音楽を評価する際に用いた「ロマンティック」の四要素、すなわち不安、憧れ、無限、異世界を備えている。それを検証したのが第六章である。作中で単純な喜怒哀楽にあてはまらない「不安」を感じるのは、この世ならざるものと接触するアンゼルスとヴェローニカのみである。二人の不

安は物語の最後には解消される。ベートーヴェンの交響曲第五番のように、『黄金の壺』においても不安は克服され、希望に傾き得る感情として扱われているのである。「憧れ」は「不安」に通じる感情でもあり、作中では特にアンゼルス的心情を説明する言葉として最も多く用いられる語の一つである。交響曲第五番批評のなかでホフマンは、「憧れ」について「戦慄、畏怖、驚愕、痛み」を伴うものだと述べたが、アンゼルスのこの世ならざるものへの漠然とした憧れ、人ならざる姿の女性ゼルペンティーナに対する恋心は、まさに「戦慄、畏怖、驚愕、痛み」を伴った。「無限」はホフマンが批評文のなかで理想音楽の世界を語る際にしばしば使う語である。『黄金の壺』においては、アトランティスを形容するのにこの言葉を好んで使う傾向がある。また交響曲第五番批評と同様に、本作においても「無限の憧れ」という言い回しが多用される。本作の物語構造も、その物語世界が無限に続いていくことを示唆している。さらに、ここではない場所、今ではない時間、すなわち「異世界」との往還は、『黄金の壺』の主題そのものである。

『黄金の壺』の楽園アトランティスは、ここではない場所、つまりどこか遠い世界であると同時に、今ではない時間、つまり過去をも意味していた。そこにはキリスト教的価値観の影響がある。ビンゲンのヒルデガルトによれば、アダムがかつて楽園にいた頃は天使たちの歌声と調和するこ

とができしたが、墮罪によってその声を失ったのだという。このことは、『黄金の壺』における人類が墮落したことによりアトランティスから追放され、自然の声を聞くこともできなくなったという設定を思わせる。またアトランティスの住人たちの単純かつ純粹な喜怒哀楽の表現そのものは、ロマン派というよりバロック時代の音楽に近い。これは『新旧教会音楽』において過去の教会音楽を「単純な」という言葉で賛美したホフマンの音楽観と矛盾しない。逆に、手の届かない過去に憧れる感情は19世紀らしい「ロマンティック」なものでもあるのだ。ホフマンは「現代」において自分の理想とする古い単純な音楽がふたたび生み出されることはない理解していたが、同時代の音楽家にも希望を見出していた。アトランティスから帰還した「語り手」は旅立つ前と違い「詩的財産」を身に帯びる。人はすぐれた芸術に触れることで成長し、新たな芸術を生み出す可能性があるのである。ホフマンはそれを信じて音楽批評家として、また作家としてペンをとったのだ。

「結論」では、本論文の内容を振り返るとともに、複雑な多面体をなすホフマンの全体像を理解するための提言を行った。従来の研究にみられる、多面体の分割的記述、伝記的研究による全体像の提示以外の、ホフマンの多面性に肉薄する第三の方法はないか。この難問に対する、一つの回答がこの論文である。